

平成25年度国公立大学附属病院医療安全セミナー

医療安全の基本は コミュニケーション

NPO法人ささえあい医療人権センターCOML
理事長 山口 育子

ささえあい医療人権センターCOMLとは

- 1990年スタート、2002年NPO法人化
- 自立・成熟し主体的医療参加ができる賢い患者を目指す 一人ひとりが「いのちの主人公」「からだの責任者」の自覚から
- 対立せず協働 ⇒活動の目的
より良いコミュニケーション
- 思いを言語化し、提言・提案できる患者・市民の増加が願い

COMLの活動 (2013年2月末現在)



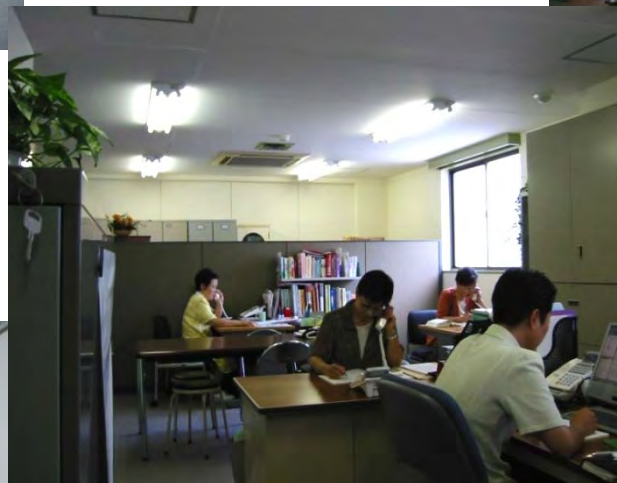
講演: 3083回

相談: 51936件



SP活動: 1225回 (OSCE304回)

病院探検隊: 71回



患者と医療者のコミュニケーション講座: 81回 (出前16回)

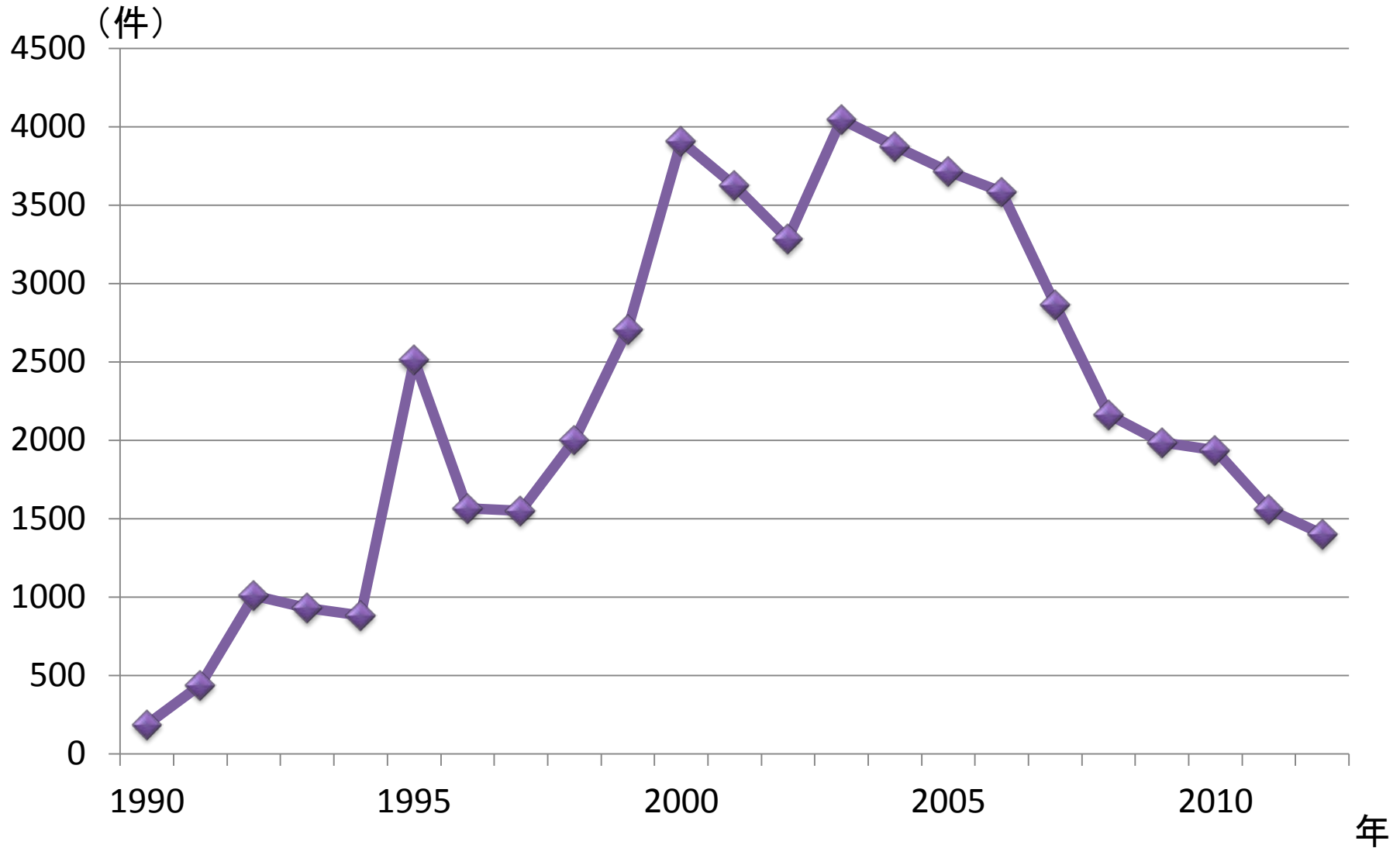


医療で活躍するボランティア養成講座 (2009年度~5期)

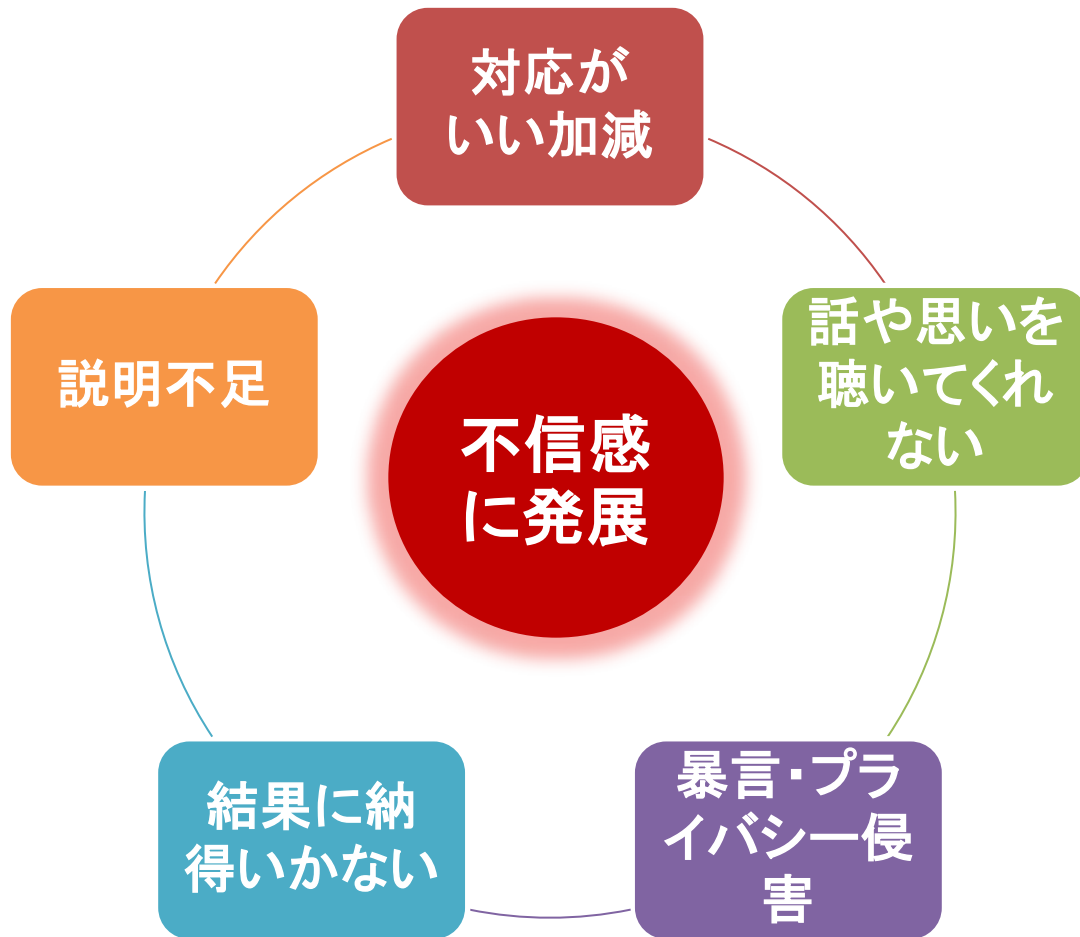


患者塾: 196回

電話相談件数の推移



ドクターへの苦情



医療スタッフへの苦情

- ・対応が雑
- ・プライバシーへの配慮がない
- ・言葉づかい
- ・善意の押しつけ などなど

“説明不足”の真相は？

- インフォームド・コンセントの必要性
インフォームド・コンセントとは「説明すること」？
「ICを取る」？ 本来は患者の権利のはずなのに…
- 患者の自己決定重視
すべて伝える時代に
「『患者が決める時代だから』と丸投げされた」



詳しい専門的な説明を長時間かけて実施

一部しか理解
できない…

記憶に留まら
ない…

理解できなかったこと
＝「聞いていない」

患者が不信感を抱く医療者の対応

- 急変時
「それまで元気だったのに・・・」「説明がなかった」
⇒「説明できない状況」の説明
- 情報の共有が不十分
口頭は漠然と説明、文書で詳細に説明
抱いていたイメージが異なる
- 真摯な姿勢が感じられない
初期対応のまずさ
不適切な言葉づかい
「向き合ってもらえた」と感じられない
話が二転三転する(最初は非を認めたのに・・・)
謝らない

患者と医療者の深い河・異文化圏

コミュニケーション
話を聴く・思いを伝える

提供側

求める側

日常

非日常

客観

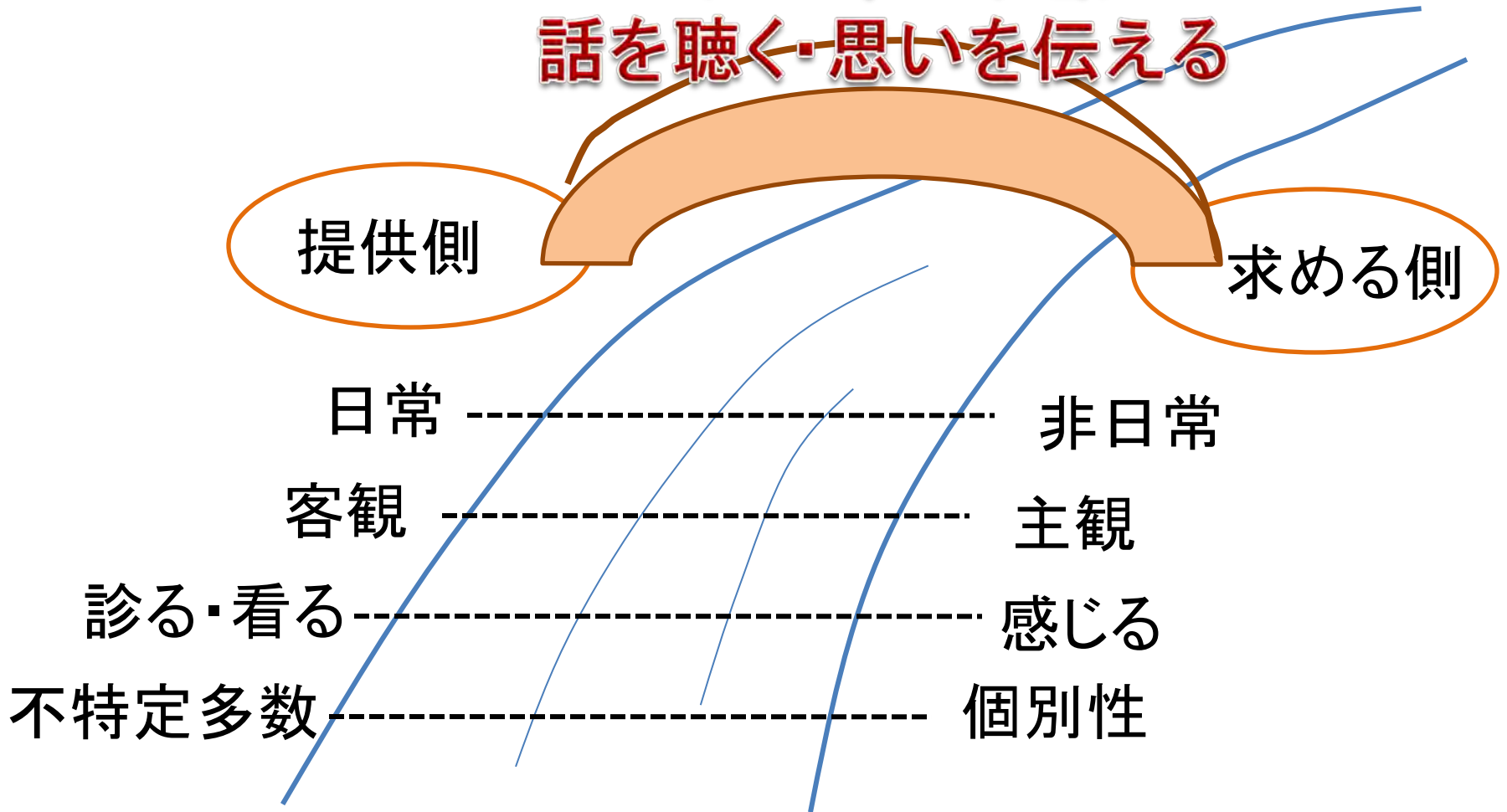
主観

診る・見る

感じる

不特定多数

個別性



患者の基本的ニーズ・願望

安全



確かな技術

安心・納得



高い倫理観



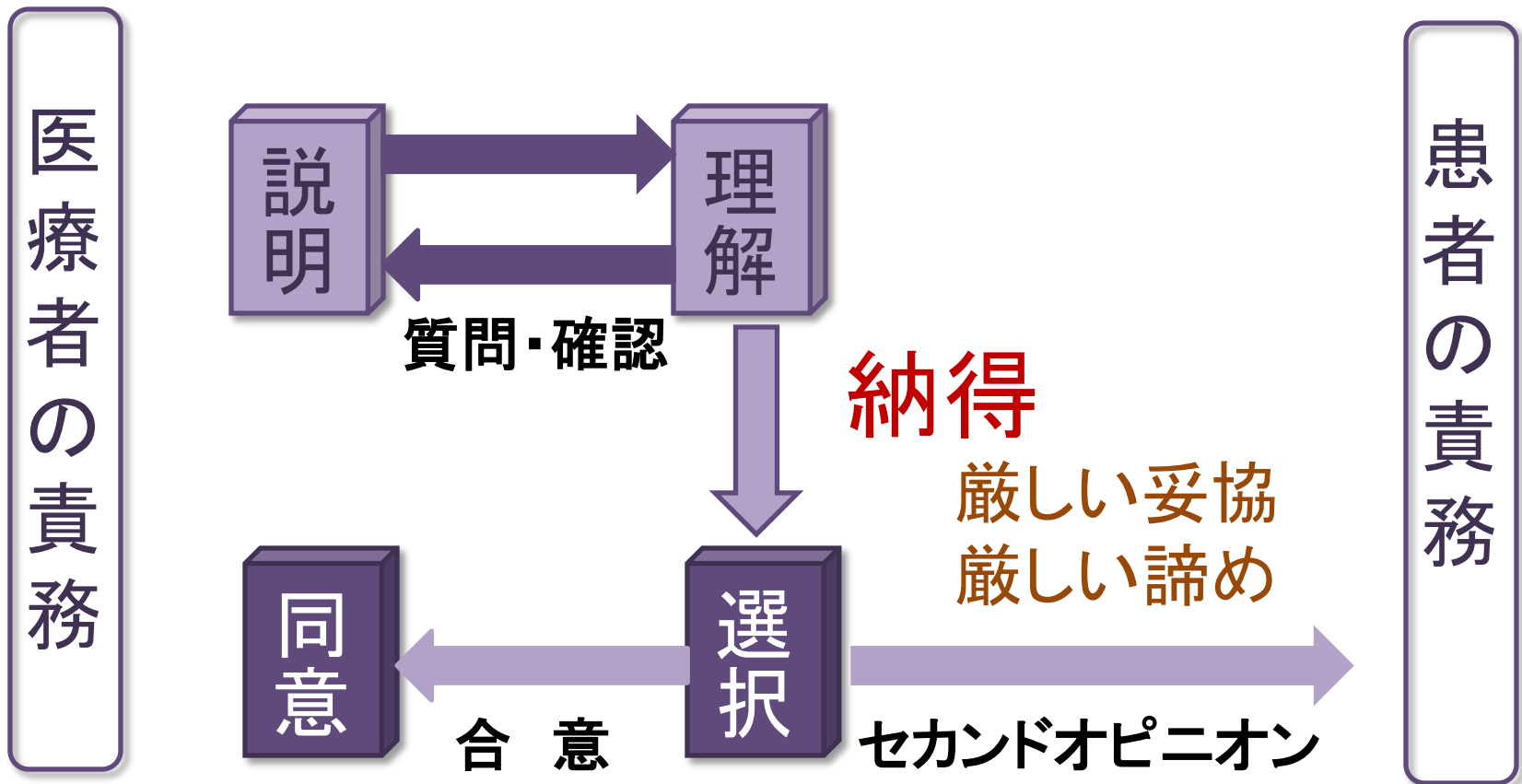
情報の共有 & コミュニケーション

インフォームド・
コンセント

協働する人間関係の創造

患者が望むインフォームド・コンセント

Informed Consent



情報過多の時代を迎えて

- “正しい”情報はどれか
「答えは一つとは限らない」共有化の不足
- どうやって情報を選べばいいのか
- 専門的な医療の詳細な説明・情報を理解できない
インフォームド・コンセントの誤解釈？
患者の権利のはずが「ICをとる」に・・・
- インターネット情報を鵜呑みにした混乱

患者の理解を阻害するもの

- **電子カルテ**

医師の視線の先にあるのはパソコン
「話が頭に入らない」「聞き取りにくい」

- **一度に伝えられる情報量の多さ**

ショックで頭が真っ白のときは何も残っていない
ふとほかのことを考えた際に・・・

- **情報の共有化不足**

同じことばを巡って抱くイメージの乖離

- **たとえ話がアダに**

「わかりやすく」のつもりが誤った解釈につながる恐れ

- **理解できていないのにうなずく患者**

医師も「説明は伝わった」と思いたい？

専門用語と
は限らない

「失礼な！」
と怒りにつ
ながった相
談も

患者が説明を理解するために

- 口頭での説明の限界
すべてを記憶に保存できない
全体の何割を理解できたか自覚困難



理解の補助

ガイドラインなどの文書
医療者からメモの勧め

- 何が理解できていないかの確認
理解・解釈内容を患者自ら言語化

情報の共有化のために

患者側の努力

- 思いの言語化
- 「理解できていない」ことに敏感に
- 質問と確認を日常から
- うまく情報を引き出す工夫

医療者側の努力

- 患者の知りたいことへの情報提供
- ↓ 冷静さと落ち着きを取り戻してから
- 医療者が伝えたいことの情報提供
 - 伝え方を工夫してわかりやすく（情報量や表現）
 - 患者の理解の確認

双方に求められる
コミュニケーション能力アップ

医療者に求められること

- “ことば”の大切さ

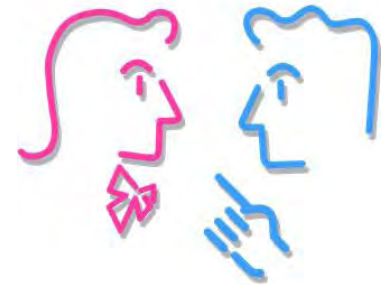
適切なことば遣い・ひとことの必要性・
心理的上下関係を生み出す表現

- 感性を働かせる

“慣れて”しまわない

- 患者の心に寄り添う

患者・家族の気持ちのスピードに合わせる
「答える」のではなく「聴く」姿勢



“ひとつこと”が大切な理由

配慮

- 待ち時間の目安
- 途中経過を伝える

理解

- 医療者の役割 ・ 早期転退院の理由 ・ 医療安全の参加 ・ 患者の状態など

安心・安堵

- メモの勧め
- 実況中継

若者全般に関する課題

- 世代を超えた会話のための共通言語の減少
- 社会人としての基本的マナーの欠如
- 生活体験の不足
- 世代を超えた交流の少なさ
- 真正面から人と向き合うのが苦手
 - 「どこまでプライバシーに踏み込んでいいのかわからない」
- 緊張する場面でにやける
- (自分が)怖くてシビアなことが他人に言えない
 - 弁護士がかかわる事件に発展したことも

患者の望むチーム医療

- 日常の診療の中で、患者の状態や必要性に応じてさまざまな職種が力を出し合うこと
チームを作ればチーム医療ではない
形態は常に変化するもののはず
 - ピラミッド構造ではない横並びの関係性
 - 各職種が誇りを持って役割を担っていることが患者・家族に伝わるような意識改革
- ⇒ 患者・家族の期待がさまざまな職種に分散

医療者に望むコミュニケーションの基本

笑顔

- 話しかけやすい豊かな表情
- どんな表情で患者と向き合っているか

まなざし

- 上からの「診て(見て)やっている」になっていないか？
- 視線を合わせてほしい

ことば

- 相手の人間性を尊重する基本
- 「ひとこと」の大切さ

聴く姿勢ともう一步踏み込むコミュニケーションを!!